

●第3回考査終了 120%の準備はできたのか。

「問われている」のは、「結果」よりも「準備」
「粘ったか」「徹底反復したか」「完璧を目指したか」

★2学年 (11/27~12/3) 文系が理系を上回る。理系挽回せよ。

- ・平均学習時間 32.5時間
- ・最高学習時間 57時間
- ・40時間以上 62人
- ・50時間以上 10人
- ・30時間以上 187人

●冬季休業中 補習 (12月25日~28日) 申込状況 (人数)

英語	倫政	数学 確率	数学 数列	古文	漢文	評論	小説	世界史	参加
73	11	122	99	105	88	69	67	34	142

●冬季休業中の課題一覧 (別紙)

- ・冬季休業が終わってから「受験0学期」になるのではない。
- ・今日から (冬季休業) が、「受験0学期」の本格始動と心得よ。
- ・「受験勉強にフライングなし」「実行」を先延ばしにしない。

「やる気」は「やり始める」と稼働する。行動が「気持ち」を変える。

【冬の学習計画のポイント3】

- ①どれだけ時間が必要なのか。具体的に書き出す。「計画なくして実行なし」。
- ②「やらされる」課題に追われるのか、「迎え撃つ」課題にするのか。←発想を転換する。
- ③1月進研模試 5教科受験に備える。「あれもこれもとタブになれ」。

◇冬季休業まで 2週間 (※国際はこの間 修学旅行 →帰国後はすぐに切り換えよ)

◇冬季休業期間 17日間 年末年始はいろいろな予定も多い時期。
メリハリをつけた計画を早めに立てる。

●11月進研模試返却

【振り返り ポイント】

- ①自己採点は正確にできていたか。記述の部分点の精度が大切。
答案作成の力=自分の答案を添削できる力=自己採点力
- ②国数英の3教科のバランスに注目する。「入試はトータル勝負」
- ③どの教科、どの分野から復習するのか。
優先順位をつけ、具体的に分析し、確実に実行(復習)する。

【舟入高校 11月進研模試 成績概況 受験者数 353人】

	国語	数学	英語	3教科総合
平均偏差値 (全国)				
70以上 (累積人数)				
60以上 (累積人数)				
50以上 (累積人数)				

● 12月22日 (金) の日程

● 1月9日 (火) の日程

□ 1～4限	授業 (金曜日の授業)	□ 8:40～ 9:10	大掃除
□ 13:20～14:10	学校集会 (冬季休業前) 学校長講話、海外派遣生徒プレゼン、 進路指導部、生活指導部講話 表彰披露、壮行式 (該当があれば実施)	□ 9:20～10:35	学校集会 (冬季休業後) 学校長講話、生活指導部講話、服装頭髪検査
□ 14:20～15:10	LHR	□ 10:45～11:35	LHR
□ 15:10～大掃除		□ 11:45～12:35	4限 (課題テスト 英) 昼休憩
		□ 13:20～14:10	5限 (課題テスト 国)
		□ 14:25～15:15	6限 (課題テスト 数)

● 今年話題の書物『**未来の年表**』(河合雅司 講談社現代新書 2017年6月初版) より
～人口減少日本でこれから起きること～

★次の空欄にあてはまる語句を周りの人と考えてみてください。

2000年生まれの人は、**下二桁の数字がそのまま年齢**になりますので、自分たちが〇〇歳の時のことだと計算しながら、考えてみてください。

①2017年	「65～74歳」人口が減り始める
②2018年	<u>18歳人口が大きく減り</u> 始める。やがて()も倒産の懸念
③2019年	ITを担う人材がピークを迎え、()不足が顕在化し始める
④2020年	()の過半数が50歳以上となり、出産可能な女性が大きく減少
⑤2030年	団塊世代の高齢化で、()郊外にもゴーストタウンが広がる
⑥2039年	死亡者数が167万9千人とピークを迎え、()場不足が深刻化
⑦2040年	全国の自治体の()近くが「消滅」の危機に晒される
⑧2050年	現在の居住地の約20%が「誰も()土地」となる。
⑨2053年	総人口が()億人を割り込む
⑩2055年	4人に1人が()歳以上となる

★本書では、第2部で「日本を救う10の処方箋」— 次世代のために、いま取り組むこと— が述べられています。大きな括りとして以下の4つが挙げられています。

①戦略的に縮む ②豊かさを維持する ③脱・東京一極集中 ④少子化対策

◇「結びにかえて」の中の一節を紹介……この本が誕生するきっかけについて、次のような文章がありました。

女子中学生の「**大人たちは何かを私たちに隠している**」という言葉であった。一昨年に、首都圏の中学・高校生主催の討論会にパネリストとして招かれた際の発言だが、強烈な印象を持って私の脳裏に焼き付いていた。(中略)

人口減少が進んでいくとどんな社会になっていくのかを、カレンダーの如く一覧できる新書をつくることで、ひとりでも多くの大人がこの「国難」に気付き、家庭において中学・高校生や大学生の息子や娘と語り合う機会ができれば—、また、中学・高校生や大学生自身が本書を手に取り、自分の問題として考え始めてくれたら—そのための労を惜しまべきではないと私は決意したのである。